

● 本会の動き ●

2022年度部会活動貢献賞 (部会CT賞)

The Award for Distinguished Service to SCEJ Divisional Activity

【部会CT賞表彰にあたって】(河瀬元明 部会CT長)

化学工学会では、基盤技術分野として6部会および展開技術分野として8部会がそれぞれ横系および縦系として各学問分野での専門家集団を形成し、その分野の学会代表として積極的な活動を行っています。また、国際的にも我が国の研究者集団の代表として国際シンポジウムの開催を行う等、積極的に寄与しています。このような部会活動は部会員の皆様の努力によって支えられていますが、特に若手会員の不断の貢献に因るところが大です。この貢献に少しでも報いるべく2010年度より部会活動貢献賞として部会CT賞が設けられました。貢献された個人のみならずグループも表彰の対象となります。本年度は13回目の表彰となり、企画、運営等の部会活動の活性化に大きく貢献された以下の1名の方を受賞者として選定しました。

受賞者の表彰は、2023年3月にオンライン・オンサイト併用開催されました第88年会初日の式典にて行いました。受賞者のこれまでの献身的な貢献に感謝すると共に、今後も部会をはじめ化学工学会の諸活動に御支援賜りたく、ここにお願い申し上げる次第です。

最後に、この度受賞されました方に、心よりお祝いを申し上げます。

材料・界面部会に対する顕著な貢献

山本大吾 氏(同志社大学)

【材料・界面部会】

山本大吾氏は、材料・界面部会における部会活動の活性化、および、部会に関係する国際会議の企画運営に対して、多大な貢献があります。山本氏は、材料化学システム工学討論会の企画運営を2017年度副幹事、2018年度主幹事として主導しました。材料化学システム工学討論会は、本部会における若手研究者主体の“夏の学校”として毎年企画されており、質疑応答を含めた1件あたりの発表時間を一般講演では1.5～2時間、学生講演では40分～1時間程度と長く取ることで、徹底的に議論することを主眼とする点に大きな特徴があります。本討論会運営の取りまとめを通して、若手研究者間のネットワーク形成のみならず、博士後期課程学生に

対し研究者としての血肉となる濃密な議論の機会を提供した山本氏の貢献は、将来の部会活動を支える基盤を作るものとして評価されます。また山本氏は、共通基盤技術シンポジウム2019の運営に参画し、各種材料プロセスにおける共通課題(基盤技術)の体系化を通じて、分科会を横断する部会活動の活性化に尽力しました。接着・粘着技術から、構造接着、異種材料接着、接着プロセス技術、接着評価技術までを一連のトピックとして取り上げた本シンポジウムには、企業32社からの登録を含む92名の参加者があり、山本氏の活動は部会と産業界との連携にも貢献しました。

国際会議の運営に対し山本氏は、第10回日韓材料シンポジウム(2012年度)では企画、現地開催準備、ホームページ開設、第14回同シンポジウム(2022年度)ではProgram Committeeメンバーとして招待講演者選出や全体プログラム調整を、それぞれ担当しました。本シンポジウムは日韓相互で隔年に開催しており、互いの最先端研究の交流を行う場として、本部会における国際交流行事の柱の1つとなっています。本シンポジウムの円滑な運営に対する山本氏の貢献は、両国の材料・界面研究における相互理解を強く推し進め、更に両国におけるキーパーソンの知己を得る機会を提供したものと評価できます。

更に山本氏は、2017年度から2年間に材料・界面部会事務局として、多岐に亘る部会活動の取りまとめや連絡調整に尽力しました。その間には化学工学年鑑13章取りまとめ委員を担当すると共に、材料・界面部会自己評価書(2010年度～2017年度)の関連資料の取りまとめにも貢献しました。部会事務局の任期満了後すぐに幹事に就任し、現在に至るまで部会事務局の経験を活かした部会活動の活性化に継続的に取り組んでいます。

上記の通り山本大吾氏は材料・界面部会に対して非常に大きな貢献をしており、今後の更なる部会活性化への貢献が大いに期待されます。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。



右：山本大吾 氏
左：河瀬元明 部会CT長

(京都大学 河瀬元明)